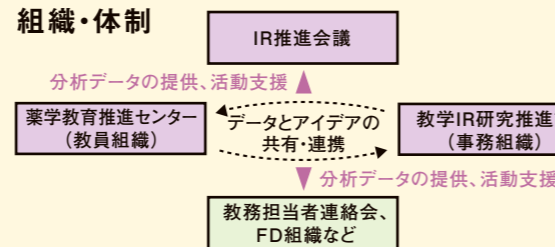


狙い	▶学内のデータの一元管理 ▶データを活用した教学改善
組織・構成員	IR推進会議(副学長以下、兼任教員5名)
主な業務	▶学内データの収集と管理 ▶教学改善に関する施策立案の支援 ▶部署間のデータ共有に関する連携強化
データの収集法	▶各部門担当者から収集 ▶各部門のデータシステムから収集
データの公開法	▶教授会、教務担当者連絡会、FD会等で分析結果を報告
活用例	▶卒業生調査の結果分析から教学改善 ▶研究系のデータを分析し、強みを発信

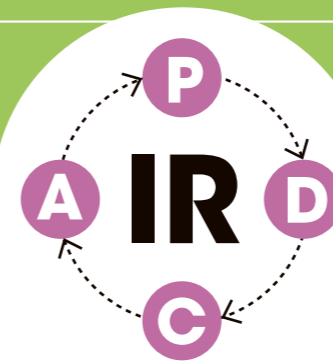
**東京薬科大学**  
 学生数/3664人  
 教員数/198人 職員数/103人  
 学部/薬学部、生命科学部  
 キャンパス/八王子キャンパス  
 ※2018年5月1日現在



# IRでまわす! PDCAサイクル

第3回

## 東京薬科大学



### 卒業生調査で強み、課題を把握 自学の特色化につなげる



IR推進会議委員  
 薬学部医療薬物薬学科長・教授  
**高木 教夫**

たかぎのりお ●1996年東京薬科大学薬学研究科薬学専攻博士課程修了。1996年トロント大学博士研究員。1999年東京薬科大学薬学部助手、2005年同大学同学部講師、2008年同大学准教授、2013年同大学教授。博士(薬学)。

#### 事務組織・教員組織が連携してデータを共有

貴学がIRに取り組み始めた当初の狙いは?

学内に存在するデータを一元管理し、教職員にフィードバックして教学改善に活用することです。本学は薬学・生命科学の2学部・2研究科があり、特に薬学部は薬剤師国家試験合格までのサポートという責務がありますから、以前から教員が自発的に小テストや学生アンケートなどのデータを取つ

て、授業改善に生かしていました。ただ、これまでは在学期間中の教務や学生生活に関するデータの蓄積はありましたが、卒業生の声を反映するしくみは十分ではありませんでした。また、教員個人が収集したデータの中にも眠ったままのものがありました。これらのデータを全学的な教学改善に活用しようとしたのが始まりです。特に薬学部は高度な医療人育成を重視した6年制に移行し、教育内容はより複雑に深化しています。学習時間や成績推移などの

データから、学生の学習意欲の変化を分析し、上位層の学生はより伸ばし、成績の伸び悩みが見られる学生には支援をしていきたいと思っています。

IR担当部署はどのような構成になっているのでしょうか。事務部門、教員部門それぞれにIRを担当する組織があり、この2つが連携してデータを共有し、課題解決のアイデアを出し合うという形で進めています。

事務組織には、2018年度に設置した「教学IR研究推進課」があります。エンrollment、マネジメントを進めるため、入試、教務、学生サポート、キャリア支援の各担当部署と同一部署に設置しています。ここで保有するのは学生アンケート等の間接評価データ、科目成績等の教務データ、入試データなどになります。

教員組織では「薬学教育推進センター」が、国家試験の結果等の直接評価データ、卒業試験の成績など、主に試験に関するデータの収集・管理をしています。

全学的な施策の立案は、学長委嘱の組織である「IR推進会議」が担当します。副学長以下、薬学部と生命科学部の教員が各2名、それに各部署から職員が加わり、委員会形式で活動しています。

また、薬学部では「教務担当者連絡会」というミーティングも毎週実施しており、教員が教務上の問題点の洗い出しと解決策を協議しています。各IR組織が、この連絡会やFD組織などにデータを提供し、日常的に小さなPDCAサイクルを回している状況です。

#### 卒業生調査により 語学教育を見直す

これまでの活動の成果は?

卒業生調査ですね。これは文部科学省の大学教育再生加速プログラムの採択を受けて実施したものです。「高校時代の状況」「大学時代の学習状況」「卒業後のキャリア」などについて、20代〜70代の5000人以上の卒業生から回答を得ました。

ここで明らかになったのは、本学の教育の強みと課題です。専門教育や医療倫理に関する教育は本学の長所として卒業生から高い評価を得ました。一方で、英語教育に課題があることが浮かび上がりました。この結果を公表したところ、すぐに英語担当教員から教育改善のための具体的な提案がありました。大学全体として語学留

動きも出ています。この経験から、PDCAをうまく回すには、分析結果をきちんとした形で公表することが鍵になると感じています。

逆に見えてきた課題は?

本学はIRの分析をデータですす教員も興味を持ってくれる大学です。大学全体により浸透させるための可視化・公開のしくみづくりが今後の課題です。その意味では、データを共有するシステムの構築も課題と言えます。

さらに説得力のあるデータを教員に示し、特徴あるチャレンジに結びつく提案をしなければならな

ターを加味した論文数、TOP10%論文数などのデータを収集し、学内で分析を行っています。これによって「それぞれの学部の研究力の強みはどこにあるのか」「薬学部6年制への移行が教員の研究にどのように影響しているか」などを明らかにします。

また、同系統の学部を持つ大学をベンチマークし、本学の研究レベルを分析して、今後は企業や高校生向けの広報にも生かしていきたいと思っています。

薬学部の場合、国から定められた「コアカリキュラム」にさらに大学ごとの特色を付加していくことが重要です。本学は長い歴史を持つっており、他大学から注目を集めている部分もあります。先陣を切つて、IRを活用した自学の特色化に取り組んでいきたいと思っています。

#### 研究の強みも明らかにし 自学の特色として発信

今後、どのような活動を展開する予定ですか。

自学の研究に関わる分析をさらに進めていきます。現在、外部業者の協力も得ながら、科研費の採択率やジャーナルのインパクトファク

### 注目のKPI

コアカリキュラム以外の  
科目数  
約4割

薬学部の全科目に占めるコアカリキュラム科目の割合は7割程度とされる。東京薬科大ではコアカリキュラム以外の科目数を4割程度にまで拡大したいという。卒業生調査等のデータを活用し、教員間で議論を深め、独自色のあるカリキュラム編成につなげたいと考えた。

\*薬学教育モデル・コアカリキュラム。日本の全ての6年制薬学部は、これを基本とし、そこに大学独自の工夫を加えて教育を行う